

日本経済新聞 夕刊 2017年10月20日

オペラ

■みつなかオペラ「妖精ヴィッリ」「外套」



「外套」はプッチーニの円熟作—仲野 達也撮影

みつなかオペラのプッチーニ・シリーズ第2弾は、若書きの「妖精ヴィッリ」と円熟作「外套」の組み合わせ。深い愛ゆえの復讐という共通テーマで結びながら作曲家の発展過程を闡明する出色の舞台に、制作陣の不屈の意志を感じた(8、9日、兵庫県川西市のみつなかホール)。

「深い愛ゆえの復讐」2作貫く

ダンただけに、C・D・フリードリヒの風景画の安易な借景が様式感の不統一を助長してしまった。ただし、アンナの死霊がロベルトを棺に誘い込むラストシーンは「愛の死」を予感させて秀逸。内藤里美は透明な響きで好演し、中嶋康子は村娘の清純さと死霊の凄みを情念的に歌い分けた。

「外套」の舞台はセーヌ川。はしけ船の船長が妻の浮気に嫉妬し、若い愛人を殺害する。下層社会の情事の心理に迫る熟成した音楽に、身も心もとろけた。音楽と対話の合一によって世紀末パリのものうい気分を美的に昇華。手回しオルガンや小唄売りなどのサウンドスケープが芸術音楽へと洗練される。写真主義の天才プッチーニを再発見した。

妻役の並河寿美と愛人役の千代崎元昭が頭抜けた歌唱で圧倒。片桐直樹のタルパと、その妻役の福原寿美枝も申し分のない貫禄だ。総じて歌手陣の充実は大規模劇場と比べて遜色がない。牧村邦彦指揮のザ・カレッジ・オペラハウス管も、陰影に富んだ緻密な演奏で舞台を盛り上げた。

(音楽評論家 藤野 一夫)

関西音楽新聞 2017年11月号

オペラ評

「演奏」と呼吸があつた
美しく伸びやかな歌唱

第26回みつなかオペラ
「妖精ヴィッリ」&「外套」

プッチーニ・シリーズ、今年には歌劇処女作の「妖精ヴィッリ」(1884)と後期の「外套」の2本立て。「外套」は三部作のひとつとして1918年に初演されたが、作曲家は「妖精ヴィッリ」との組み合わせも構想していた



井原広樹の演出は写真的な手法で、アントニオ・マストロマッティの落ちついた色調の装置が美しい。当時流行していたド



写真上下©仲野達也

田麻由美、佐野裕子、中内綾美)が踊った。歌手では小林峻の若者ロベルトが充実しており、内藤里美(アンナ)、森寿美(グリエルモ)も役目を果たしていた。

イツの森を舞台とする幻想的な物語に基づく「妖精ヴィッリ」は、語り手を省略するかたちで上演され、ダヴィデ・パッサーニの映像が効果をあげた。写真上。パリのセーヌ河上の荷物船で繰り広げられるグランギニョール劇による「外套」では、作曲家が愛憎劇の鮮烈さに惹かれていただけに、さらにドラマチックな取り組みがあってもよかったかもしれない。

「妖精ヴィッリ」で重要な役割を占める精霊たちの舞踏は法村友井バレエ団の4人(河野裕衣、坂

「外套」では並河寿美が若い妻ジョルジュッタを歌い存在感をみせた。福原寿美枝のフルーゴラも立派だったが、より性格的な表現があれば一層映えたであろう。榎貴志(ミケール)と松本薫平(ルイーザ)が熱演、片桐直樹(タルパ)、谷口耕平(ティンカ)、西上亜月子(矢野勇志(恋人たち)、また合唱を指揮する岩城拓也が流しの歌手を歌った。みつなかオペラ合唱団も好演。

プッチーニ後期の作品は、当時の先進作曲技法

を取り入れた精緻なオーケストラにもその特徴がある。ホールに対応したオーケストラの縮小が行われ、「外套」ではその精妙さと力強さが十分発揮されたとは言い難いが、牧村邦彦の指揮するザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団は、歌い手と呼吸をあわせて、旋律を美しく伸びやかに歌わせた。とりわけ珍しい「ヴィッリ」の上演で、みつなかオペラはわが国のオペラ史に残る成果を上げたといえよう。(10月8日、みつなかホール)

(夏山知)